

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：72622

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320148

研究課題名(和文)江戸時代知識人の清朝史研究と近代日本における東洋史学

研究課題名(英文)The researches on the Qing History by intellectuals in Edo era and the Asian History Study during the Modern Japan

研究代表者

楠木 賢道 (KUSUNOKI, Yoshimichi)

公益財団法人東洋文庫・研究部・研究員

研究者番号：50234430

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 16,000,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀初頭の荻生北溪や19世紀初頭の志筑忠雄・近藤重蔵は、清朝が満洲族によって建国・統治された王朝であることを重視し、清朝を正しく理解する上で内陸アジアへの理解を深めることが重要と考えており、荻生北溪の協力者である荻生徂徠や、近藤重蔵の研究仲間であった高橋景保は満洲語の研究にも取り組んでいた。国民国家・主権国家とは無縁であり、幕藩体制という権力分散的な状況下を生きていた江戸時代の知識人は、現在と比べると劣悪な史料状況にあったにもかかわらず、一国史観に絡め取られることなく、内陸アジア的な性格を持つ清朝の本質を理解していたのである。

研究成果の概要(英文)：Ogyu Hokkei in the early 18th century, as well as by Shizuki Tadao and Kondo Juzo in the early 19th century emphasized the fact that the Qing Dynasty was founded and ruled by the Manchu people and the importance of a deeper understanding of inner Asia in order to understand the Qing Dynasty correctly, Ogyu Hokkei's partner Ogyu Sorai and Kondo Juzo's co-researcher Takahashi Kageyasu who grappled with the study of the Manchu language. Although intellectuals during the Edo period lived in the decentralized social situations of the shogunate system, which had nothing to do with the idea of nation state nor sovereign state, and were in a poorer situation in terms of historical materials than present-day historians, they understood the essentially inner Asian nature of the Qing Dynasty without getting entangled in the one state historical perspective.

研究分野：東洋史

キーワード：清朝 江戸 満洲 荻生北溪 志筑忠雄 近藤重蔵 荻生徂徠 高橋景保

## 1. 研究開始当初の背景

(1)中国史研究において、各時代の日本人が同時代の中国の何を知ろうとしていたのか、そのためにどのような努力をしていたのか、そしてどのように中国を理解していたかは、極めて興味深いテーマである。日本人としての自らの研究の源泉を探ることであり、同時代人のまなざしを通して現代の我々の視角を相対化することでもあるからである。その点、江戸時代は、幕府が海禁政策をとり、いわゆる鎖国状態にあったため、日本人の渡航は禁じられていたが、長崎貿易を通じて積極的に漢籍が輸入されており、当時の日本における清朝史研究の様相を知る手掛かりが多く残されている。さらに18世紀以降はオランダ語書籍も盛んに輸入されるようになり、オランダ語に訳されたヨーロッパのシノロジーを介した清朝史研究も行われるようになってくる。

(2)このように江戸時代知識人が関心を持った清朝は、儒教イデオロギーで統一され、一君万民の中華体制からなる明朝の継承国家であるだけでなく、満洲族の皇帝を戴き、八旗という世襲の支配者層を有し、最終的にはマンチュリア・モンゴリア・チベット・ジュンガリア(天山北路)・カシュガリア(天山南路)を領土とする王朝となる。マンチュリアは支配民族満洲族の原住地であり、モンゴリアで遊牧するモンゴル族首長層は王公層・同盟勢力として清朝に迎えられた。チベットではゲルク派チベット仏教の最高位ダライ=ラマを教主とし、清朝皇帝が施主となる関係を取り結んでチベットを保護下においた。最大の敵対勢力ジューン=ガルは平定の過程で殲滅され、無人の地となったジュンガリアには、新たにモンゴル諸部やカザフが遊牧するようになり、カザフ首長層はモンゴル王公に準じる地位を清朝宮廷内で与えられた。ムスリムの居住するカシュガリアには元来ベクと呼ばれる官僚層があり、清朝は彼らを科挙官僚同様に転勤族とする一方、清朝皇帝は異教徒ではあるが、公正な支配者としてムスリムに対した。清朝は、中華王朝としての側面だけではなく、元朝を継承した北アジアの王朝としての側面を持ったいわば二重帝国だったのである。

## 2. 研究の目的

(1)権力分散的で、一種の封建的国家体制である幕藩体制下にあった日本において、知識人たちがどのように同時代の清朝を認識していたかを明らかにすることを目的とした。

(2)また江戸時代の清朝認識は、近代の東洋史学に継承されるのか、断絶があるのかを見通すことをも目的とした。

(3)なぜこのようなことを研究にするのか。それは我々が現代中国の国家体制と領土

的・民族的枠組みを過去に遡及させて、あるいは我々が暮らす現代日本という国民国家を無意識に投影させて、清朝の歴史、中国の歴史を構築しようとする誘惑に常に駆られているからである。そしてこの呪縛から解放されるためには、主権国家成立以前の時代を生きた人々が、どのように清朝を認識していたかを検討することにより、一国史観を相対的にとらえることが有効であると考えたからである。また清朝は中央集権的な明治国家成立以後においても、なお40年あまり存在したからであり、江戸時代人の清朝理解と明治時代人の清朝理解には継続と断絶があると考えられるからである。本研究の究極の目的は、我々の歴史的思考を一国史観の呪縛から解放することにあった。

## 3. 研究の方法

(1)研究代表者がこれまで20年あまりにわたって断続的に研究してきた江戸時代の清朝研究を、上記の「研究の目的」にそって検証するとともにさらに深く分析する、さらに研究代表者の専門である清朝国家論に関する最新の研究と対照させながら、またアメリカの最近の研究潮流「新清史」と対比させながら、江戸時代の清朝史研究の具体像を描き出す。このように東洋史研究者である研究代表者が野心的に日本近世学術史に取り組むところが本研究の最大の特色であった。

(2)日本近世史、清代財政史、比較思想の専門家を研究分担者とし、分野横断的な研究陣容を整え、個別の研究が清朝国家論を核とし有機的に関連する学際的な研究をめざした。

(3)近代との継続と断絶については、江戸時代の蘭学者として、明治・大正・昭和初期を生き抜いた大槻如伝とも関係の深い、初代台湾総督府民政長官、初代満鉄総裁を勤めた後藤新平に焦点を当て、展望することを試みた。

## 4. 研究成果

(1)18世紀初頭、享保の改革期に八代将軍徳川吉宗の寄合儒者であった荻生北溪が吉宗の諮問に答え、享保の改革の参考資料とするために清朝の政権としての特徴について分析し、儒教的観念に拘泥することなく、清朝が満洲人の皇帝を盟主として、満洲人の王公とモンゴル人の王公が同盟を結んだ政権であり、満洲人、モンゴル人、漢人それぞれに個別の法律が制定されていたという、本質に到達していたことを検証した。

19世紀初頭、長崎に赴任した幕臣であり文筆家である大田南畝が偶然、ロシアの外交使節レザノフ来航に遭遇し、長崎に入荷し、売り出されるまで保管されていた大量の漢籍の中から清朝とロシア関係史を理解するために最も適した『欽定平定準爾方略』を見だし、的確に關係箇所を抜き書きしたことを検証した。また江戸の勘定奉行所の上司

に対して、清朝の例を引きながら、大田南畝が、ロシアに対して開国するという事は、外交使節を受け入れ、かれらのために首都に公館を建設し、滞在を許可することであると、内々に報告したことを新たに明らかにした。

引退した長崎通事である志筑忠雄が、ラクスマンの来航後、『鎖国論』を記し、国を閉ざすことは天理に反するがそれでも日本は国を閉ざすに十分な理由があることを示し、レザノフの来航後に、『二国会盟録』を記し、それでも開国をするならば、ネルチンスク条約を結んだ清朝の例があることを示し、日本の言論界に二つの選択肢を提示したことを検証した。またロシアと清朝が、国際法に則り平等な立場で条約締結できた理由を、志筑忠雄は両国がモンゴル帝国の継承国家であったことに求めていたことを検証した。

名古屋市の蓬草文庫で史料調査を行い、尾張徳川家の陪臣、水野正信が、荻生北溪の『建州始末記』、大田南畝の『平定準ガ爾方略』の摘録、志筑忠雄の『鎖国論』『二国会盟録』のすべてを、写本として所有していたことを新たに見いだした。水野正信は幕末期外交に一定の影響を持っていた学者であり、明治時代に東京帝国大学教授として活躍する伊藤圭介とも親交があった。さらに志筑忠雄の『二国会盟録』はプチャーチンと日露和親条約を取り結ぶ勘定奉行川路聖謨の座右の書でもあった。以上のことから、江戸時代の清朝史研究の業績は、幕末外交に役立てられたと考えることができる。またその業績は近代アカデミズムに受け継がれたという見通しを持つこともできる。

(2) 志筑忠雄によって着手された清朝とチベット仏教の関係に対する分析は、將軍家の図書館、紅葉山文庫の図書館長、書物奉行であった近藤重蔵に引き継がれることになる。近藤重蔵は、自らが管理する紅葉山文庫のなかから、22種に及ぶ漢籍を利用しながら、『喇嘛考』(1812)を記し、唐朝、元朝、明朝、清朝とチベット仏教の関係を論述しており、なかでも『衛蔵図識』(1792)によりながら、清朝とダライ=ラマ、ジュン=ガル部、ホシュート部、チベットの貴族層との間の複雑きわまりない歴史を説明することに成功している。近藤は、中華思想に拘泥することではなく、歴代清朝皇帝もアクターの一として、チベットをめぐるリアルポリティクスを見事に描出している。これはチベット学の父と称されるウィリアム=ウッドヴィル=ロックヒルが『衛蔵図識』の英文訳注を発表する80年前の事である。さらに近藤重蔵は、清朝とチベット仏教の関係を説明するのに、『衛蔵図識』などの漢籍を用いるだけでは飽き足らず、満洲語とオランダ語に堪能な同僚の書物奉行、高橋景保を介して満洲語の辞書『増訂清文鑑』や、志筑忠雄が『二国会盟録』で用いたイエズス会宣教師ジェルピオンの日記

のオランダ語版を用いている。以上のような執拗なまでの近藤重蔵のチベット仏教に対する関心は、清朝を理解することとチベット仏教を理解することとは不可分な関係にあるということを理解していたからである。

(3) 明治から昭和初期にかけて活躍した官僚政治家である後藤新平は、安政4年に奥州水沢に生まれる。遠縁には高野長英がおり、同郷人といってもいい大槻如伝とも親交があった。大槻如電の祖父、大槻玄沢は志筑忠雄と親交のあった蘭学者であり、大槻如電は明治維新後も、江戸時代の碩学としての生き方を昭和の初めまで貫いた。このような環境のなかで後藤新平も江戸時代の教養を修得し、続いて明治政府の医学校にまなび医者となり、その後、児玉源太郎に見いだされ、台湾総督府初代民政長官となる。後藤は台湾の科学的統治をめざし、臨時台湾旧慣調査会を組織して、清朝の政治制度の徹底調査を命じる。その成果として刊行されたのが、『清国行政法』であり、現実の統治に資するため、儒教的価値観に拘泥することなく、清朝の政治制度の多様な実態が記されている。続いて後藤は満鉄初代総裁になると、同様に満鉄の科学的経営をめざし、満鉄調査部(課)を設置し、満鉄調査部からは後に、伝統的な中華世界観に絡め取られることのない、清朝発祥の地における多元的、多民族的な社会の実態が報告される。ここには後藤の学んだ江戸時代の学問の影響があると考えられる。後藤は後に東京市長になり、市政改革に取り組むことになるが、現状のみから取り組むのではなく、ここでも江戸時代の江戸の市政で参考となることを調査させ、徳川将軍が統治者としての行動をとるだけではなく、大名から町人にいたるまでの江戸市民と同様の振る舞いをし、水道管理・祭祀において江戸市民として応分の負担をしていたことを見いだす。ここから、後藤は東京市内の国家機関からも東京市が租税を徴収するという政策にたどり着く。後藤は旧制度、旧社会として江戸市政を切っ捨てて捨てるのではなく、江戸市政の実態を把握し、市政改革のための参考事例を見いだそうとしているのであり、この態度には台湾民政長官・満鉄総裁時代の経験が活かされていると考えられる。

(4) 研究分担者浪川は、弘前藩を例にとり、『弘前藩御刑法牒』『国日記』を分析して、清律の影響が強く見られること、陽気が生ずる春夏に死刑を執行することは天の運行に逆らうものであるから、死刑は秋冬に執行するという「秋審」の考え方が入っていること、この考え方が、天命飢饉の直後の不作に対する禁忌として、立ち現れたことを明らかにした。このことは天命期に、清朝の法思想、清律が、弘前藩の法思想、法運用に内在化されたことを意味する。

(5)以上の研究成果を総合すると、次のような結論を導き出すことができる。

この10年間ほどの間に、アメリカのアジア史学界においては新清史という研究潮流が盛んになっている。その特徴は、清朝が満洲族によって建国・統治された王朝であることを重視し、清朝を正しく理解する上で内陸アジアへの理解を深めることが重要と考える、研究を進める上で漢語史料のみならず、満洲語など漢語以外の言語で書かれた史料を用いることにある。

このうち、は、前述の18世紀初頭の荻生北溪や19世紀初頭の志筑忠雄・近藤重蔵にも共有されており、荻生北溪の協力者である兄、荻生徂徠や、近藤重蔵の研究仲間であった高橋景保は満洲語の研究にも取り組んでいた。彼ら江戸時代の知識人は、中華思想と中国の古典に深い知識を持ちながらも、それらを相対化し、清朝研究を行っていたのである。すなわち、江戸時代の清朝研究は、近年の最先端の清朝研究と基本的に同じ視角をすでにもっていたのである。

重要なことは、満洲語など漢語以外の史料を利用できるかどうかではなく、最後の中華王朝という側面にのみとらわれず、中華思想を相対化して、権力の分散的状況と世襲の支配者層の存在に代表される清朝の内陸アジア的性格に注目して、研究を進めることができるかどうかである。清朝は、中国歴代王朝史・中国一國史の枠組みには収まりきれないのである。国民国家・主権国家とは無縁であり、幕藩体制という権力分散的な状況下を生きていた江戸時代の知識人は、現在と比べると劣悪な史料状況にあったにもかかわらず、一國史観に絡め取られることなく、内陸アジア的な性格を持つ清朝の本質を理解していたのである。現在、清朝史研究を行っている我々は、このことを内省的に受け止めなければならない。

また江戸時代の清朝研究の成果は、幕末期外交にも活かされたと考えられ、さらには部分的には台湾統治や満鉄経営にも活かされたという見通しを持つことができる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

楠木 賢道、成島柳北を生んだ浅草・蔵前の知的ネットワーク、季刊環、査読有、59巻、2014、252-255

楠木 賢道、後藤新平『江戸の自治制』を読む、季刊環、査読有、59巻、2014、320-333

楠木 賢道、「国民国家」と同君連合としての清朝、季刊環、査読無、55巻、2013、226-229

宮脇 淳子、楠木 賢道、杉山 清彦、『清

朝史叢書』の現代的意義、季刊環、査読無、55巻、2013、222-249

楠木 賢道、江戸時代享保年間日本有関清朝及満語研究、満語研究、査読有、2013-1号、2013、75-83

浪川 健治、十八世紀(変容する地域と民衆運動)、歴史、査読無、120巻、2103、1-29

[学会発表](計8件)

浪川 健治、不作忌避の禁忌と豊穰祈願「長期の19世紀」における社会意識の系譜、米沢史学会(招待講演)、2014年10月18日、米沢女子短期大学(山形県・米沢市)

楠木 賢道、江戸時期日本の清史研究、吉林師範大学満学論壇系列講座16(招待講演)、2014年9月24日、四平市(中国)

楠木 賢道、満文档案所見ガ爾丹死後清廷、蒙古王公及蔵伝仏教的関係、紀念王鍾翰先生百年誕辰暨清史・民族史国際学術研討会、2013年8月25-28日、北京市(中国)

楠木 賢道、明清の交代と江戸時代による情報収集、第21回清朝史叢書研究会、2013年6月10日、藤原書店(東京都・新宿区)

楠木 賢道、『江戸の清朝研究』について、第16回清朝史叢書研究会、2012年12月20日、藤原書店(東京都・新宿区)

楠木 賢道、Perceptions of the Manchu Qing Dynasty during the Edo Period Japan, Round Table "The Nature of the Manchu Qing Empire and of its Relations with other Polities in Asia"(高等研究所・招待講演)、2012年12月5-8日、プリンストン市(アメリカ合衆国)

浪川 健治、18世紀 変容する地域と民衆運動 一盛岡藩「宗門人別目録」をてがかりに、東北大学国史談話会(招待講演)、2012年6月9日、東北大学(宮城県・仙台市)

楠木 賢道、The tradition and the current status of Manchu studies in Japan, The Manchu Studies Symposium in Seoul(高麗大学招待講演)、2011年4月15日、ソウル市(大韓民国)

[図書](計9件)

浪川 健治(監修)、山形県庁、青森県史資料編 近世6、幕末・維新、2015、711

趙 令志、楠木 賢道ら、中央民族大学出版社、紀念王鍾翰先生百年誕辰学術論文集、2013、1032(426-435)

浪川 健治、河西英通ら、岩田書院、グローバル化のなかの日本史像、2013、323

浪川 健治、河西英通ら、清文堂、近世日本の言説と「知」、2013、319

松村 潤、柳澤 明、楠木 賢道ら、公益財団法人東洋文庫、内国史院档 天聰五年、2013、614

長谷川 成一、浪川 健治ら、青森市教育委員会、新青森市史 通史編第2巻 近世、2012、726 (378-400)

烏云畢力格、楠木 賢道ら、内蒙古教育出版社、扎魯特历史文化、2011、274 (188-200)

劉 小萌、楠木 賢道ら、社会科学文献出版社、清代滿漢關係研究、2011、670 (32-40)

青山 忠正、岸本 覚、浪川 健治、有志舎、講座 明治維新 2 幕末政治と社会変動、2011、288

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

楠木 賢道 (KUSUNOKI, Yoshimichi)  
公益財団法人東洋文庫・研究部・研究員  
研究者番号：5 0 2 3 4 4 3 0

### (2) 研究分担者

浪川 健治 (NAMIKAWA, Kenji)  
筑波大学・人文社会系・教授  
研究者番号：5 0 3 1 2 7 8 1

井川 善次 (IGAWA, Yoshitsugu)  
筑波大学・人文社会系・教授  
研究者番号：5 0 3 1 5 4 5 4  
(平成24年度まで)

上田 裕之 (UEDA, Hiroyuki)  
筑波大学・人文社会系・助教  
研究者番号：7 0 5 8 1 5 8 6  
(平成24年度まで)